

目次

序章	本書の課題と問題の限定	3
第一節	課題設定理由	3
第二節	研究史の整理	6
第三節	問題の限定	11
第四節	本書の構成	12
第一章	中国問題をめぐる日本海軍の対英観と政策	20
	——一九三五～三八年——	
	はじめに	20
第一節	日中戦争以前の対英観と政策	22
第一項	一九三〇年代前半の対英観	22
第二項	中国幣制改革の実施と対英提携論のあらわれ	25

第三項	西安事件の勃発と対英提携論の広まり	31
第二節	日中戦争初期の対英観と政策	37
第一項	蒋介石政権否認論の台頭とイギリスへの反発	37
第二項	イギリスを仲介とした和平工作への対応	42
第三項	トラウトマン工作への対応	46
第三節	日中戦争の長期化と対英工作	50
第一項	対英工作をめぐる協議	50
第二項	蒋介石政権への対応をめぐる議論の活発化	53
第三項	イギリスを仲介とする和平工作の再浮上	56
おわりに		62
第二章	門戸開放・機会均等をめぐる日本海軍の対米観と政策	82
	——一九三五～三九年——	
はじめに		82
第一節	対米観と政策の転換	83
第一項	対米依存型経済の自覚と対米観の穏健化	83
第二項	南進論の高まりと門戸開放・機会均等の標榜	88
第二節	日中戦争の拡大と対米関係	93

第一項	門戸開放・機会均等および互惠通商協定政策への賛意表明	93
第二項	アメリカの和平構想と海軍の「権益思想」	97
第三項	アメリカの対日抗議とそれへの対応	99
第三節	日米通商航海条約廃棄通告と第二次世界大戦への対応	105
第一項	対米関係への憂慮	105
第二項	海軍による対米具体策の立案	109
第三項	外務省による対米政策の検討	112
第四項	揚子江開放とその実態	115
第五項	南方への再注目	118
おわりに		122
第三章	上海租界をめぐる日本海軍の対英米政策	141
	——一九三五～四〇年——	
はじめに		141
第一節	日中戦争直前の上海租界対策	145
第一項	中国政府および工部局への対応	145
第二項	対英強硬論の萌芽	146
第二節	日中戦争の勃発と上海租界問題の「対英」問題化	148

第一項	上海租界問題の浮上とイギリスへの反発	148
第二項	対英圧力の強化	153
第三節	第二次世界大戦の勃発と上海租界問題の「対米」問題化	157
第一項	欧州交戦国軍隊撤退問題をめぐる対米顧慮	157
第二項	対米関係打開工作と上海租界問題	160
第四節	上海租界問題をめぐる日米海軍の対立	163
第一項	イタリア軍撤退問題	163
第二項	イギリス軍警備区継承問題	165
おわりに		169
第四章	南洋群島と海南島を中心とする日本海軍の対英米戦略	185
	——一九三六～四〇年——	185
はじめに		185
第一節	海南島を中心とする対英戦略の展開	186
第一項	日中戦争以前の対英観と戦略	186
第二項	対英関係の悪化と戦略研究の進展	190
第三項	年度作戦計画の進化と海南島の対英航空基地としての位置付け	193
第二節	南洋群島を中心とする対米戦略の展開	199

第一項	中国問題をめぐる対米樂觀認識と南洋群島の基地化の遲滞	199
第二項	南洋群島基地化の促進と航空用兵思想の進化	203
第三節	海南島の対英米軍事拠点化	209
第一項	作戰構想における英米一体化と海南島の対英米軍事拠点化	209
第二項	海上交通保護基地という役割の強調	214
おわりに		216

第五章 一九四一年日米交渉と海南島駐留問題 234

はじめに		234
第一節	出先の逸脱による中国駐兵問題をめぐる混乱	236
第一項	日米交渉以前の中国駐兵に対する日本側の認識	236
第二項	日米交渉と中国駐兵をめぐる出先の逸脱	238
第二節	中国駐兵問題をめぐる海軍と外務省の認識の一致	243
第一項	海軍の開戦準備と海南島	243
第二項	「日支和平基礎条件」の策定	247
第三節	海南島への長期駐留とアメリカの対日批判	253
第一項	外務省による讓歩案の作成と陸軍の動向	253

第二項	海南島駐留に固執する海軍と「甲案」の決定	255
第三項	海南島駐留問題に対するアメリカの反応	259
おわりに		261
終章	本書の結論と残された課題	275
参考文献一覧		283
あとがき		299
索引		306